

## 2023年度 実施報告書

---

所属：千葉大学教育学部附属小学校

氏名：中谷佳子

略歴：千葉大学教育学部修士課程に在籍。勤務校では帰国学級主任。日本地理学会地理教育専門委員。日本地理教育学会企画委員。令和6年帝国書院令和6年度版地図帳著作など。

概要：VUCAといわれる時代にあって、子どもたちには、「新たな価値を創造する力」が求められています。しかし、学校教育の学び、特に教科教育の学びの中では、まだまだ知識の伝達が中心で、子どもの創造性の育成にはさまざまな課題があります。そこで、本研究では、「遊び」「情熱」「目的意識」の3要素に焦点をあて、子どもたちが創造性を大いに発揮し、社会課題の解決に向けて動き出すような授業の実現を目指し、単元構想を行いました。実践をする中で授業者が感じた創造性教育の魅力や可能性、また課題についてお伝えできればと思います。

### (1) 創造性研究の背景

現在、私たちは、VUCAといわれる、とても不確実性の高く、予想困難な時代を生きています。そのような中で子どもたちには、「新たな価値を創造する力」が求められています。しかしながら学校教育、特に教科教育の授業においては、まだまだ知識の伝達に主眼が置かれています。特に私は今、さまざまな国から帰国した子どもたちが学ぶ帰国学級の担任をしています。日々の生活のふとした場面で、子どもたちがもつ豊かな発想力や想像力が、新たな創造につながるような場面を目にすることがあります。そのような力を教科教育の中で大いに発揮させたい、と考えたことが研究のスタートです。

では、どのように授業を進めていけばよいのだろう。ワグナー（2014）は、イノベーションを「創造性」と置き換えたうえで、イノベーターを育てるカギとして、「専門性」「クリエイティブな思考力」「モチベーション」をあげ、中でもモチベーションがはるかに重要だ、という論を紹介します。また、モチベーションの中でも内的モチベーションの重要性を説きます。ワグナーによれば、内的モチベーションは、「遊び」「情熱」「目的意識」のプロセスをたどる、といいます。そこで、社会科という教科の単元構想の中で、学習過程の中に意図的に「遊び」「情熱」「目的意識」を位置付けることを通して、教科教育の中で新たな価値を創造する力を育成していきたい、と考えたのが、本実践です。

## (2) 単元構想と NPO 法人との協働の位置づけ

本実践は、第 5 学年「わたしたちの生活と森林」の単元で行いました。現在、日本の森林には、戦後の拡大造林による人工林の荒廃、森林蓄積量の増大、林業従事者の減少やこれらの課題によって引き起こされる土砂災害など課題が山積しています。しかし、本校のような都市部に住む子どもたちにとって、その課題は空間的にも心理的にも非常に遠いものです。特に、本実践は本校に設置されている帰国学級に通う子どもたちを対象に行いました。日本での生活経験が短い帰国生にとってはなおのこと遠く感じられるでしょう。

このように空間的にも心理的にも遠い森林の課題に対して、「何とかしたい」「何とかしなくては」という「情熱」を生み出し、その「情熱」をもとに「日本の森林の課題解決のために」こうしていこうという、社会に参画する「目的意識」へとつなげていけるような単元構想を行いました(資料①)。本単元は、大きく 3 つの段階に分けることとしました。

### ①【第 1 段階 人の営みから日本の森林やその課題を学ぶ段階】

ここでは 2 つの手立てをとりました。まず、日本の森林の課題を自分に引き付けて考えられるように、すでに国税として運用が始まろうとしている森林環境税を教材としました。森林環境税の是非を問うことを通して、現在の日本の森林の現状を探究していきたいという意欲につながっていこうと考えました。

また、子どもたちが日本の森林課題を人の営みの中で共感的に学んでいく手立てとして、東京都青梅市で約 20 代にわたって森林を育てる中島林業の中島大輔さんや NPO 法人青梅りんけんの方々にご協力いただきました。青梅の現場には、2 回お邪魔させていただき、現地の取材(動画撮影)やインタビューを行って、教材づくりを行いました。

### ②【第 2 段階 森林での「遊び」を体験する段階】

本校から電車で 40 分ほどのところに「千葉県立船橋県民の森」があります。住宅地に残された森の中で、「遊び」に没頭する活動を通して、これまで教室で想像してきた日本の森林の新たな魅力や価値に気づいてほしい、と考えたためです。ここでは、森林の楽しさや魅力を人々に伝えることを目的として活動している NPO 法人千葉県森林インストラクター会の方々にご協力をいただきました。授業者自身が知らない森林について教えていただいたり、当日の子どもたちの活動の手助けをしていただいたりしました。

### ③【第 3 段階 よりよい森林のために動き出す段階】

第 1 段階、第 2 段階の学びによって、「みんなが幸せな幸せな森林って?」「森林を何とかしなくては」と、「情熱」や「目的意識」を高めた子どもたちが、その課題に参画していく段階としました。学びの様相の中で、子どもが「こんなことをやってみたい」という思いを大切に、課題に向っていけるようにしたい、と考えました。

## (3) 授業の実際

### 【第 1 時 「森林は〇〇?」】

子どもたちには、事前に「森林」と聞いて思い浮かべる景色と一番近い画像を Teams (オンラインプラットフォーム) に共有するよう話しました。「ニュージーランドに住んでいた時は、よく森に散歩に行った。」「ドイツのお城の周りの静かな森林がよかった。」と言いながら、それぞれの画像を選んでいきました。1 時間目は、その画像を紹介し、それぞれがもつ「森林」の経験やイメージを話し合うことから始めました。そこで、授業者が、「森林ってどんなものなんだろうね?」と問うと、「宝物」という声が上がりました。「森林は「宝物」と黒板に書くよ?」と確認すると、多くの子が「いいよ。」とうなずきました (資料②)。

そこで、宝物と書いたすぐ後に、林野庁の「木を使ってくれてありがとう」のポスターを提示しました。「えー、大事な木なのに切っちゃうの。」「おかしくない?」との声から、「なぜ、木を切ってくれてありがとうなの?」、の問題が成立しました。「日本は森林が多いからかな。」とのつぶやきに、「国土の約 3 分の 2 が森林であること」「森林には人工林と天然林があること」などを教科書や資料集で確認していきました。その後、スライドで森林面積と森林蓄積の推移のグラフ (資料③) を確認しました。「木が成長して、森林の面積ではなく量が増えること」は、森林問題を考える上で大切な認識です。しかし、子どもたちはなかなか理解できないようでした。そこで、2008 年に植えられた河津桜の太さと苗木の太さを比べてみました (資料④)。すると、「確かに同じ面積でも、木が成長すれば、どんどん場所をとる。」「でも、なんで木が成長することが悪いことなの?」という問いが出てきました。そこで、次時への問い、「日本の人工林が成長するのは良いこと?悪いこと?」を板書し、1 時間目を終わりました。

### 【第 2 時 「木が成長するのは悪いこと?」】

2 時間目は、2017 年 7 月九州北部豪雨のようすを伝えるニュース番組を視聴することから始めました。多くの流木が流れ出す様子を見たり、整備された人工林と荒廃した人工林の画像を比較したりすることで、人工林と土砂災害の関係を認識していきました。その後、この状況に対して、来年度から森林環境税 (国税 16 歳以上年間 1000 円) が徴収されることを提示しました。「お金がとられるの?」「自分の家の近くには、森林がないのに…?」「森林は近くに住んでる人の問題なの?」などつぶやきました。

ここで、用意しておいた小黒板 (写真⑤) を使って、「森林環境税に納得できるか?できないか?」今の自分の考えと近いところにマグネット<sup>(2)</sup>を貼るようにしました。本時の振り返りには、「人工林について調べてみたい。」「林野庁のしごとが知りたい。」など、と書かれていたため、自習時間を利用して、日本の森林や人工林について、個人の問いや関心に合わせて調べる時間を確保しました。

### 【第 3 時 「森林環境税って何に使うの?」】

授業を始めると、「森林っていったい誰の問題なのか?」という問いと同時に、「税金になっても、ちゃんと森林のために使ってくれるのかわからない」という発言がありました。子どもたちは、「税金が無駄に使われているニュースを見たよ。」「だから、ちゃんと使って

くれるのかわからない」と税金の使い方に関心をもっていました。「近くに森林はなくても、日本の誰かが困っている、誰かの命がかかっているから、税金になってもいいと思う」という意見と、「自分たちの近くにはない森林に対して税金を払う必要があるのか」という意見で話し合いが続いていきました。それぞれの意見を出し合うことで、森林の課題に対する憤りや切実感など「情熱」につながる子どもたちの姿が見られました。

そこで、森林環境税の用途①森林の整備②人材の育成③木材の利用や普及啓発の具体的な内容が書かれたパンフレットを配りその使い道を調べました。子どもたちには「書いてあることはわかるけど、やっぱりきちんと森林のために使ってくれるか、わからない」という思いが残っているようでした。マグネットをちょうど真ん中につけた、なおこ（以下すべて仮名）の振り返りには、資料⑥のように判断しかねる思いが書かれていました。

#### 【4時間目 「森林で働く人の仕事って？」】

授業のはじめ、「森林は宝物」と単元名を板書すると、子どもたちからは、「宝物じゃないかもしれない」「人工林はお金も使うし、自然災害も…」「しかも日本は森林が多すぎるでしょ」「でも空気もきれいにしてくれて」「動物の住処にもなる」と口々に話し始めました。そこで、板書の「宝物」のあとに「？」をつけ資料⑦、「宝物だと思っていた森林は、本当に宝物なのか？」を探っていくことにしました。まず、教師が取材した中島さんの動画を視聴しました。前半は、中島さんはじめ青梅りんけんのスタッフの方が、ボランティア育成講座のための打ち合わせや講座のための環境を整備する様子が映っています。「林業のプロっぽい人とそうでない人がいる」「木を伐るのではなく、（ボランティア希望者に）教えるの？」「中島さんは先生？」などと、子どもたちは気付いたことや興味をもったことを次々につぶやきながら視聴しました。次に、1週間後に行われたボランティア育成講座の様子を視聴した後、林業を生業としながら、講座の講師や森林の普及活動に尽力する中島さんのインタビュー記事（資料⑧）を読みました。授業後の森林環境税に対する子どもたちの判断が、資料⑨の黒板です。納得できるかできないか、決めかねていた子ども全員が「できる」にマグネットを動かしていました。

判断を決めかねていたなおこも「できる」にマグネットを動かしました。その日の振り返りには、「(動画の中で中島さんが呼ばれている) 大ちゃんがこんな苦勞をしているなんて知らなかった」とあり、中島さんの仕事にふれ、その思いを知ったことが判断の変容につながったことがわかりました。

その後、中島さんからのプレゼントとして工作に使用できる間伐材（資料⑩）を渡し、中島さんに手紙を書く活動を行いました。子どもたちは中島さんのことを「大ちゃん先生」と呼ぶほど親近感をもっていました。抽象的な林業従事者という存在ではなく、「林業に従事する大ちゃん先生」と、固有名詞の人を通して森林について考えることが、親近感や共感につながっていきました。

#### 【校外学習 森林「遊び」体験】

中島さんが『みんな、知らなすぎる』と言っていた身近にある森に行ってみよう」と話すと、子どもたちはとても喜びました。子どもたちには森林体験を、学習の一環ではなく「遊び」という目的のもと、自由に活動できるようにしたいと考えていました。そこで、授業者からの指示は安全面のみとし、活動に目的を与えたり、子どもたちの活動に必要な以上の制限は設けないようにしたりしました。

現地では、千葉県森林インストラクター会の方々にご協力をいただき、まずは森林を巡っていきました。子どもたちは、「先生、何か虫がいる。名前は？」「この白いものは何ですか？」「あのキノコを採ってもいいですか？」と、インストラクター会の方に自由に質問しました。活動の中では、とにかく虫を集める子どもたち、さまざまなキノコを採集する子どもたち、木の皮を集める子どもたちなど、興味やこだわりに合わせて多彩な活動が生まれました（資料⑪）。体験後、インストラクター会の方から、「子どもの反応は今までに見たことがないほど強力なものだった。大いに刺激を受け、まだまだ勉強の余地があることを反省した」との言葉をいただいたほどです。また、今回森林に関わるさまざまな団体と学校をつなげてくれたNPO法人コレクティブの秋元さんからは、「いつも森林体験を受け入れる学級の子どもの様子が全然違う」と言われました。具体的な違いについて質問したところ、これまで森林を案内した学級と比較して、①主体的に関わろうとする、②目的がなくても自分で探す（自然と関わることそのものを学びとしている）③まず触る・聞く・体験するという活動が見られる、とのことでした。子どもたちが、「遊び」を楽しんだことはもちろん、授業者が目的を与えたり、必要以上の制限を設けたりせず、「遊び」と位置付けたことが、子どもの主体的な活動を生み出した、と考えています。

#### 【第5時 「森林環境税に納得できる？できない？」】

森林体験を終えて、ここまでの学びから、もう一度、「森林環境税に納得できるか？」を話し合う時間としました。とうごは森林体験をするまで、「森林環境税1000円は高すぎる。」と言って、スッキリの納得できない、の場所にマグネットをつけていた。しかし、最終的な判断は、スッキリのどちらともいえないにマグネットを動かしました。授業の中では、森林体験でインストラクター会の方に教えていただいた生態系のピラミッドの話を出し、「森林が整備されなかったら、虫も死んで、自分たちの食べ物もなくなってしまうかもしれない。」と話しました。この意見の変容について、授業後にインタビューを行いました（資料⑫）。最終的に子どもたちは、調べ活動、友だちとの話し合い、そして森林「遊び」を通して、森林環境税に対する自分ならではの考えをまとめていきました。

#### 【ここまでの実践を終えて 小活】

森林環境税を知り、その是非を話し合う中で、自分とは違う意見を聞いたり、友だちと意見を対立させたりしたことや林業に従事する中島さんの思いに共感することで、もっと森林について知りたいという「情熱」をもって学習しました。同時に、知らなかった日本の森林について、こんなことを、このような方法で調べてみよう、と追究していく「目的意識」はもつことができました。また、森林体験を「遊び」と位置づけ活動したことで、

新たな森林の魅力に気付いていきました。このような学習によって、子どもたちは、主体的に森林について調べ、環境税の是非に対して、多角的・多面的に考え、自分ならではの考えを創造することができました。

しかし、授業者が願っていたような、日本の森林の課題解決のために行動しようという、社会参画につながる「目的意識」を自ずから生み出す姿はなかなか表出されませんでした。それ以上に、「もっと森林について知りたい。」「この問題について調べたい。」という「情熱」を感じました。このことについて、「遠い森林のことは、自分たちには関係ない。」と発言していたためにインタビューをしました(資料⑬)。ここから、子どもが社会課題に対してはっきりとした「目的意識」をもって、その改善のために主体的に働きかけるような「情熱」を生み出すことは、難しいことだと実感しました。

しかし、この活動には続きがあります。たまたま、中島さんが、「自分たちの地域では、森林環境贈与税どうなっているだろう？森で仕事をしています、今のところ正直、恩恵を感じられません。どうか、森林環境のために間違った使われ方しないでほしいです。森で作業中、たまーにキックバックありますけど…w」とフェイスブックに投稿していたのを見つけ、子どもたちに紹介しました。すると、「やっぱり～」「ちゃんと使われてないかもしれない」「千葉市は大丈夫かな？」「このことを大人に知らせないと…」と話し出しました。今、子どもたちは、森林環境税のことをみんなに伝える壁新聞を制作しています。

#### 【本実践における成果と課題】

小活にも書いたように、本実践ではもっと森林のことを知りたい、調べたいという「情熱」や「目的意識」は見られたものの、社会参画につながる「目的意識」を主体的に生み出すことは難しいとわかりました。ワグナー(2014)にもあるように、「遊び」「情熱」「目的意識」をプロセスとしてとらえ、単元導入時に十分な「遊び」の時間を確保することが重要ではないかと思えます。また、「遊び」から生み出された「情熱」や「目的意識」が、本実践では中島さんのように、誰かの課題解決や幸せのためにつながるという意識をもてることも、子どもが社会課題に参画し、創造性を発揮するような授業につながるのでは、と考えます。何よりも本実践では、授業者が「創造性は教科教育の中でも育てることができる」という意識をもって取組めたことが一番の収穫となりました。

#### 【註】

- (1) 森林・林業学習館 (<https://www.shinrin-ringyou.com>) より引用
- (2) 粕谷昌良(2019)「アナザーストーリーの社会科授業 異なる立場から多角的に考える力を育てる」(学事図書) p111 を参考にした。

#### 【参考文献】

トニー・ワグナー 藤原朝子訳(2014)『未来のイノベーターはどう育つのかー子供の可能性を伸ばすもの・つぶすものー』(英治出版)

